「新・山手樹一郎著作年譜」補遺　Ⅰ

影山　亮

本稿は前号の『立教大学大学院日本文学論叢』第十三号（平成二五年一〇月、立教大学大学院日本文学専攻）に掲載した、「新・山手樹一郎著作年譜」の補遺である。

前号でも述べたが、山手樹一郎（一八九九～一九七八）はその数多くの作品で一般読者の娯楽に寄与した時代小説家である。その人気は他の業界にも及び、貸本業界では「山手樹一郎の作品はどんなものでも」（芳井先一「貸本屋調査から―公共図書館と民衆を結ぶもの―」『図書館雑誌』昭和三一年六月、日本図書館協会）と喜ばれ、社会心理研究所の調査（「大衆文学の読まれ方―貸本屋の調査から―」『文学』昭和三二年一二月、岩波書店）では夏目漱石、江戸川乱歩の次に位置するほどであった。昭和三一年度の単行本の出版数は五七冊に及び、二位の吉川英治の四五冊に大差をつけていて、『実話読物』（昭和三三年四月、日本社）では「とても一年間の出版点数とは思えない超人的なものであるが、『何と云つても山手先生の本が一番よく廻転しますよ』と、貸本屋のオヤジさんが悦に入つているところからも、その大衆的人気のほどが察しられよう。」と報じられている。

またその著作が現在までに六一度映画化されている。こういった人気は所得にもつながり、昭和三三年度には二千三百八八万千円で作家部門の一位に輝いている。単純に比較できるかは疑問だが、映画スター部門二位の長谷川一夫とほぼ変らない金額である。そんな山手だが、文学研究において忘れ去られた作家の一人という感が否めない。その象徴が著作年譜であった。著作数が膨大であること、あるいは大衆文学研究が評論家主導であったことなどが起因してか、作家の基礎情報とも言える著作年譜が未整理だったのだ。管見の限り、山手の著作年譜はこれまで一三本あった。その中には他と比べて、格段に詳細な八木昇「山手樹一郎年譜」（『大衆文学大系　二七』昭和四八年七月、講談社）も存在するが、それでも誤りや抜けている著作が非常に多かった。そういった状況を解消するため、筆者は「新・山手樹一郎著作年譜」を制作、発表した。この年譜はこれまでの年譜の誤りを訂正したことはもちろんのこと、これまで知られていなかった著作を数多く発掘し、加えた。詳しくは前号を参照していただきたいが、この年譜を発表した後も調査を続行した結果、さらに多くの著作を発掘するに至った。よってこれを「新・山手樹一郎著作年譜」補遺　Ⅰとしてここに発表する。

この中には、室生犀星や小川未明などの、文学研究においてもメジャーな作家が名を連ねていた児童雑誌（『少女文芸』）に掲載された小説や随筆や、農業雑誌（『肥料』）、漁業雑誌（『海の村』）などの専門業界向けの雑誌に掲載された小説などが新たに発掘した著作が含まれている。こういったことは、山手樹一郎という作家自体の、新たな輪郭を知る上でも重要な著作であった。言わずもがなこれで年譜が完成したわけではなく、これからも著作の発掘は続くし、一生の作業であろう。であるから一定数に達した際には、補遺　Ⅱ、Ⅲ…と発表していきたいと考えている。

さて前号の「新・山手樹一郎著作年譜」と併せてご覧頂きたいが、これまで山手樹一郎といえば戦後の人気作家、というあいまいな印象が強かった。しかしこの「新・山手樹一郎著作年譜」を見ることで、その人気の詳細な推移が明らかになってきた。具体的に見ると、大正末から昭和一桁は編集業の傍ら著作を発表していたが、昭和一四年に博文館を辞めて職業作家になり、同年の一一月から『岡山合同新聞』で連載した「桃太郎侍」で人々に認知され始める。その後昭和一五年に二八（〇）作、昭和一六年に四二（二）作、昭和一七年に一七（一）作、昭和一八年に一九（二）作、昭和一九年に七（二）作、昭和二〇年に五（一）作、昭和二一年に六（〇）作、昭和二二年に五（〇）作というような著作の発表数である。括弧内の数字は連載ものの数値だ。「桃太郎侍」で得た人気は徐々に出始めているが、終戦間近になるとさすがに数が減っているのが分かる。しかし昭和二三年からの復活ぶりが凄まじい。昭和二三年に五一（四）作、昭和二四年に四二（六）作、昭和二五年に一九（五）作、昭和二六年に一九（五）作、昭和二七年に二〇（八）作という著作数である。また著作数は減っても、連載数が増加している点は人気作家として認知され、多くの需要があった証拠である。その後、昭和三〇年代に入るとその人気は更なるものになり、高額所得者の上位の常連になり、昭和四〇年代には日本作家クラブの会長に就任する。つまり、山手樹一郎の全盛期は昭和二〇年代中盤から昭和三〇年代中盤までと言えるのである。こういったことも山手樹一郎の著作年譜が整理されたことによって、明らかになり始めた事実である。

最後に表記についてだが、ゴシック体の太字になっている著作は、今回新たに発掘した著作である。各著作の発表月日、巻号に関しては、全て新発掘と見なしている。また単行本や全集には再録はされていることから著作名は知られていても、初出紙誌などが不明だった著作もある。この場合は初出年月、初出紙誌をゴシック体の太字にしている。さらに同年同月同日に発表された著作は、五〇音順に並べた。加えて連載ものの初出紙誌月日の巻号が「?」になっている場合があるが、これは連載開始時の巻号は判明したものの、連載終了時の巻号は様々な施設や方法で調査したものの確認出来なかったからである。「※」が付いている著作は、広告などでその存在が明らかになったが、当該の巻号の紙誌を確認出来ないものである。また［註］が付いている著作や誌紙は最後にまとめて［註］で説明している。

月日	作品名・書名	執筆名	種類	初出誌・紙名	巻・号	初刊本
	大正八（一九一九）年					
10 1	図面の行方［註1］	井口長二	小説	少女号	4・10～?	
10 1	編集室より	井口長二	後記	少女号	4・10	
	大正九（一九二〇）年					
6 1	海辺の家	井口長二	小説	少女号	5・6	
6 1	編集室より	井口長二	後記	少女号	5・6	
6 1	保田へ行った話	長二・鳴秋・かつら・青花	随筆	少女号	5・6	
11 1	青い窓	井口長二	小説	少女号	5・11	
11 1	編集室より	井口長二	後記	少女号	5・11	
12 1	最後の格闘（闇の光）［註2］	井口長二	小説	少女号	5・12	
12 1	編集室より	井口長二	後記	少女号	5・12	
	大正一〇（一九二一）年					
10 1	あきらめ	井口長二	小説	少女号	6・10	
12 1	コーヒーの香	井口長二	後記	少女号	6・12	

月日	作品名・書名	執筆名	種類	初出誌・紙名	巻・号	初刊本
	大正一二（一九二三）年					
1 1	塒なき鳥	井口長二	小説	少女号	8・1〜?	
2 1	フランス語	井口長二	後記	少女号	8・2	
2 1	忘れぬおもかげ	井口長二	随筆	少女号	8・2	
6 1	義士ヲアイテニ	井口長二	小説	小学画報	4・6	
10 1	おれい	井口長二	後記	少女号	8・10	
	大正一三（一九二四）年					
2 1	おしせまって	井口長二	後記	少女号	9・2	
2 1	よし江の心配	井口長二	小説	少女号	9・2	
3 1	大軍ノ中ヘ	井口長二	小説	小学画報	5・3	
4 1	少年ノチエ	井口長二	小説	小学画報	5・4	
5 1	虎ヲタイジタ槍	井口長二	小説	小学画報	5・5	
6 1	大水ノ中ヘ	井口長二	小説	小学画報	5・6	
7 1	バカナサンゾク	井口長二	小説	小学画報	5・7	
8 1	運動熱	ゐぐち・ちやうじ	後記	少女号	9・8	
8 1	女ながらも	井口長二	小説	少女号	9・8	
8 1	女ニマケテ	井口長二	小説	小学画報	5・8	

月	日	作品名・書名	執筆名	種類	初出誌・紙名	巻・号	初刊本
9	1	なつかしい散歩	ゐぐち・ちやうじ	後記	少女号	9・9	
9	1	馬上ノヰネムリ	井口長二	小説	小学画報	5・9	
10	1	手ノ中ノオ銭	井口長二	小説	小学画報	5・10	
11	1	足ノウリモノ	井口長二	小説	小学画報	5・11	
12	1	強イ清正	井口長二	小説	小学画報	5・12	
		大正一四（一九二五）年					
1	1	彦左衛門ト梅	井口長二	小説	小学画報	6・1	
2	1	いそがしいく	ゐぐち・ちやうじ	後記	少女号	10・2	
2	1	ハダカノオ医者	井口長二	小説	小学画報	6・2	
2	1	雪の夜	井口長二	小説	少女号	10・2	
3	1	ミクニノタメニ	井口長二	小説	小学画報	6・3	
4	1	逃ゲルガ勝	井口長二	小説	小学画報	6・4	
5	1	カタキハ樽	井口長二	小説	小学画報	6・5	
7	1	重兵衛ノ早業	井口長二	小説	小学画報	6・7	
8	1	峠ノ山賊	井口長二	小説	小学画報	6・8	

月	日	作品名・書名	執筆名	種類	初出誌・紙名	巻・号	初刊本
9	1	カジマン	井口長二	小説	小学画報	6・9	
10	1	ランバウナ侍	井口長二	小説	小学画報	6・10	
11	1	三ツ目ノオ化	井口長二	小説	小学画報	6・11	
12	1	オオカミ退治	井口長二	小説	小学画報	6・12	
12	15	ワウジノユメ	井口長二	小説	小学画報	新年増刊	
		大正一五（一九二六）年					
1	1	腕ダメシ	井口長二	小説	小学画報	7・1	
2	1	古猫退治	井口長二	小説	小学画報	7・3	
2	1	ロビンソン物語	井口長二	小説	タカラノクニ	8・10～?	
4	1	喧嘩の名人	井口長二	小説	小学画報	7・4	
4	1	長短と価値	井口長二	随筆	少女文芸	1・1	
4	1	初恋	井口長二	随筆	少女文芸	1・1	
4	1	ひとりごと	井口長二	随筆	少女文芸	1・1	
5	1	一小景	井口長二	随筆	少女文芸	1・2	

月日	作品名・書名	執筆名	種類	初出誌・紙名	巻・号	初刊本
	大正一五（一九二六）年					
5 1	蚊	井口長二	随筆	少女文芸	1・2	
5 1	馬鹿にされた話	井口長二	小説	少女文芸	1・2	
5 1	鼻	井口長二	随筆	少女文芸	1・2	
5 1	見事ナ仇討	井口長二	小説	小学画報	7・6	
6 1	アブナイ勝負	井口長二	小説	小学画報	7・7	
6 1	編集の後	井口長二	後記	少女文芸［註3］	1・6	
7 1	本能寺	井口長二	小説	小学画報	7・8	
8 1	卑怯ナ先生	井口長二	小説	小学画報	7・9	
9 1	負ケタ豪傑	井口長二	小説	小学画報	7・10	
9 1	秋風立ちて ※	井口長二	小説	少女号	11・9	
10 1	無題［註4］	ゐぐち・ちやうじ	後記	少女号	11・10	
10 1	弱イ侍 強イ百姓	井口長二	小説	小学画報	7・11	

月	日	作品名・書名	執筆名	種類	初出誌・紙名	巻・号	初刊本
昭和二（一九二七）年							
2	1	ハゲシイ気合	井口長二	小説	小学画報	8・2	
4	1	辻斬ノ失敗	井口長二	小説	小学画報	8・4	
6	1	捕手カコマレテ	井口長二	小説	小学画報	8・6	
昭和一〇（一九三五）年							
9	15	十五夜勝負	山手樹一郎	小説	婦人画報	373	
昭和一一（一九三六）年							
6	10	関取供養盃	山手樹一郎	小説	相撲	1・2	
8	10	文政相撲鑑	山手樹一郎	小説	相撲	1・4	
昭和一三（一九三八）年							
9	1	海賊昔話	山手樹一郎	小説	新青年	19・14	
昭和一四（一九三九）年							
2	1	一樹の陰	山手樹一郎	小説	婦女界	59・2	

月日	作品名・書名	執筆名	種類	初出誌・紙名	巻・号	初刊本
5 1	海の軍神廣瀬中佐	山手樹一郎	絵本	主婦之友 付録	5月号付録	
5 1	川添しま子	山手樹一郎	絵本	主婦之友 付録	5月号付録	
5 1	戦車の軍神西住大尉	山手樹一郎	絵本	主婦之友 付録	5月号付録	
5 1	空の軍南郷住大尉	山手樹一郎	絵本	主婦之友 付録	5月号付録	
5 1	白衣の観音竹内喜代子	山手樹一郎	絵本	主婦之友 付録	5月号付録	
5 1	病院船の天使大熊よし子	山手樹一郎	絵本	主婦之友 付録	5月号付録	
5 1	陸の軍神橋大隊長	山手樹一郎	絵本	主婦之友 付録	5月号付録	
	昭和一五（一九四〇）年					
1 10	春宵つるぎ供養	山手樹一郎	小説	婦女界	61・2	
3 1	桜餅	山手樹一郎	小説	婦女界	61・5	『春の虹』H3（1991）4月・光風社
5 1	お千加茶屋［註5］	山手樹一郎	小説	少女の友	33・5	『天の火』S18（1943）12月・新泉社
6 1	魂で読め	山手樹一郎	小説	新満州	4・6	
8 1	精限り根限り	山手樹一郎	小説	新満州	4・8	
9 1	道は近きにあり	山手樹一郎	小説	新満州	4・9	
12 1	義士の妹	山手樹一郎	小説	少女の友	33・12	

月日	作品名・書名	執筆名	種類	初出誌・紙名	巻・号	初刊本
	昭和一六（一九四一）年					
1 1	生甲斐	山手樹一郎	小説	肥料	1月号	
5 1	兄の声	山手樹一郎	小説	少女の友	34・5	
8 1	明月の妻	山手樹一郎	小説	少女の友	34・8	
	昭和一七（一九四二）年					
1 1	勝名乗	山手樹一郎	小説	戦線文庫	39	
11 1	小父さん志士［註6］	山手樹一郎	小説	芸能文化	9・11	『土の花嫁』S27（1952）7月・同光社磯部書房
	昭和一八（一九四三）年					
1 1	尊攘街道	山手樹一郎	小説	海の村	8・1～9	
5 20	逃亡五日	山手樹一郎	小説	読切雑誌	6・6	
	昭和一九（一九四四）年					
5 1	母の手拭	山手樹一郎	小説	少女の友	37・5	
	昭和二〇（一九四五）年					
2 10	新雪	山手樹一郎	小説	大陸	2・2	
	昭和二一（一九四六）年					
11 25	天保剣客伝	山手樹一郎	講談	新演芸	第2号	

月日	作品名・書名	執筆名	種類	初出誌・紙名	巻・号	初刊本
	昭和二三（一九四八）年					
4 1	五千両の門出	山手樹一郎	小説	冒険少年	1・4	
7 1	虎	山手樹一郎	小説	小説と講談	1・1	
8 1	隠密奉行	山手樹一郎	小説	仮面	臨時増刊号	
8 1	柳生又十郎	山手樹一郎	小説	小説と講談	1・2	
9 1	うきよ硯	山手樹一郎	小説	小説と講談	1・3	
9 1	男の土俵	山手樹一郎	小説	講談と実話	1・3	
9 1	悲恋女掏摸	山手樹一郎	小説	天狗	1・2	
10 1	姉御小町	山手樹一郎	小説	小説ファン	第2集	
11 1	山男は怒る	山手樹一郎	小説	小説と講談	1・5	
12 15	小町芸者	山手樹一郎	小説	小説ファン	第3集	
	昭和二四（一九四九）年					
3 1	女狐月夜	山手樹一郎	小説	小説と講談	2・3	
4 1	江戸地獄	山手樹一郎	小説	小説と講談	2・4～?	
5 1	五月雨の曲	山手樹一郎	小説	少女の友	42・5	
5 10	花嫁変化	山手樹一郎	小説	青春タイムス	2・4	

月日	作品名・書名	執筆名	種類	初出誌・紙名	巻・号	初刊本
6 1	恋馬車	山手樹一郎	小説	大衆小説	2・6	
6 1	新三しぐれ	山手樹一郎	小説	探偵よみもの	39	
6 15	恋慕しぐれ	山手樹一郎	小説	小説ファン	第6集	
9 25	妻恋情話	山手樹一郎	小説	小説ファン	第10集	
	昭和二五（一九五〇）年					
5 10	花魁刺青	山手樹一郎	小説	小説街読物別冊	読切小説別冊	
6 1	自他共に許す	山手樹一郎	随筆	丸	3・6	
9 1	秋の女	山手樹一郎	俳句	大衆文芸	12・6	
	昭和二六（一九五一）年					
12 15	一年余日の思い出	山手樹一郎	随筆	富士	4・13	
	昭和二七（一九五二）年					
3 15	花の雨について	山手樹一郎	随筆	富士	5・3	
	昭和二八（一九五三）年					
1 1	花魁仁義	山手樹一郎	小説	実話講談の泉	1月号	
5 1	無題	山手樹一郎	随筆	大衆文芸	13・2	

月	日	作品名・書名	執筆名	種類	初出誌・紙名	巻・号	初刊本
		昭和二九（一九五四）年					
1	1	今年も余日	山手樹一郎	随筆	大衆文芸	14・1	
3	1	風来坊	山手樹一郎	小説	読切倶楽部	3・3	
11	21	むすめ自慢	山手樹一郎	随筆	週刊サンケイ	11月21日号	
		昭和三〇（一九五五）年					
7	15	あとがき	山手樹一郎	後記	単行本書き下ろし		『軽文学新書　股旅小説集』S30（1955）7月・鱒書房
11	1	うかつに口はきけない	山手樹一郎	随筆	映画と演芸	16	
		昭和三一（一九五七）年					
2	1	柳生流秘太刀	山手樹一郎	小説	小説春秋	3・3	
		昭和三三（一九五八）年					
1	2	少年の虹［註7］	山手樹一郎	小説	朝日新聞ジュニア版	～12月4日	『少年の虹』S34（1959）1月・東都書房
1	5	食いねえ食いねえ	山手樹一郎	随筆	あまから	77	
8	1	夕立の女［註8］	山手樹一郎	台本	放送文化	13・8	
8	3	素人の弁	山手樹一郎	随筆	読売新聞		

月日	作品名・書名	執筆名	種類	初出誌・紙名	巻・号	初刊本
	昭和三四（一九五九）年					
1 30	無題［註9］	山手樹一郎	後記	単行本書き下ろし		『少年の虹』S34（1959）1月・東都書房
2 15	緋牡丹の夢	山手樹一郎	小説	別冊　宝石	12・2	
5 1	私の還暦	山手樹一郎	随筆	大衆文芸	19・5	
7 1	私の貸家	山手樹一郎	随筆	文藝春秋	37・7	
7 15	背番号は三〇	山手樹一郎	対談	大衆小説	5・11	
10 1	八幡鳩九郎	山手樹一郎	小説	夕刊タイムズ	～翌々年1月9日	『八幡鳩九郎（一）～（三）』S36（1961）3月・桃源社
	昭和三五（一九六〇）年					
4 5	作者のことば	山手樹一郎	随筆	平凡	16・4	
12 4	ある日私は	山手樹一郎	随筆	週刊読売	19・50	
	昭和三七（一九六二）年					
3 10	世話物書き雑記	山手樹一郎	随筆	歴史読本	37・3	
5 1	ただそれだけのこと	山手樹一郎	随筆	小説倶楽部	15・5	

月	日	作品名・書名	執筆名	種類	初出誌・紙名	巻・号	初刊本
		昭和三八（一九六三）年					
2	1	去年今年	山手樹一郎	随筆	小説倶楽部	16・2	
4	17	胡堂さんをいたむ	山手樹一郎	随筆	北国新聞		
7	10	浪人雑話	山手樹一郎	随筆	歴史読本	38・7	
		昭和三九（一九六四）年					
3	14	作者のことば	山手樹一郎	随筆	北国新聞		
3	21	青雲燃える	山手樹一郎	小説	北国新聞	翌年3月2日	『青雲燃える』S41（1966）1月・桃源社
5	1	河岸の柳	山手樹一郎	小説	週刊読売	23・22～30	
8	1	少年三剣士	山手樹一郎	小説	こども家の光	1・1～2・7	『山手樹一郎長編時代小説全集　別巻二』S55（1980）3月・春陽堂
11	1	私の広告	山手樹一郎	随筆	文芸朝日	3・11	
12	10	剣客の実力	山手樹一郎	随筆	歴史読本	39・12	
		昭和四〇（一九六五）年					
1	1	春待月	山手樹一郎	随筆	大衆文芸	25・1	

月	日	作品名・書名	執筆名	種類	初出誌・紙名	巻・号	初刊本
		昭和四一（一九六六）年					
6	11	万年筆コレクション	山手樹一郎	随筆	週刊新潮	6月11日	
7	1	あのことこのこと（1）	山手樹一郎	随筆	大衆文芸	26・7	
8	1	あのことこのこと（2）	山手樹一郎	随筆	大衆文芸	26・8	
		昭和四二（一九六七）年					
6	1	一つの門	山手樹一郎	随筆	家の光	43・6	
		昭和四三（一九六八）年					
1	1	わたしの書き初め	山手樹一郎	随筆	婦人生活	1月号	
4	1	目にしみた青麦畑	山手樹一郎	随筆	月刊いけぶくろ		『池袋名鑑』S45年2月・池袋東西名店会事務局
		昭和四四（一九六九）年					
1	1	私の正月	山手樹一郎	随筆	潮	105	
4	7	古稀になって	山手樹一郎	随筆	読売新聞		
7	1	酒のあれこれ	山手樹一郎	随筆	都道府県展望	7・130	

月日	作品名・書名	執筆名	種類	初出誌・紙名	巻・号	初刊本
	昭和四五（一九七〇）年					
9 1	伝奇小説の第一人者	山手樹一郎	随筆	全集書き下ろし		『角田喜久雄全集　月報二』S35(1970)9月・講談社
9 16	わたしの心	山手樹一郎	随筆	読売新聞		
	昭和四六（一九七一）年					
12 20	規則正しい生活が一番	山手樹一郎	随筆	産業新潮	21・1	
	昭和四八（一九七三）年					
1 1	漢方薬なら安心して飲める	山手樹一郎	随筆	労働安全衛生広報	83・5	
	昭和五二（一九七七）年					
4 1	鮒釣り［註10］	山手樹一郎	随筆	大衆文芸	37・4	

【註】

[1] 「図面の行方」は現在のところ、山手樹一郎の著作における最初の連載小説だと判明した。

[2] 大正九[一九二〇]年一二月『少女号』五巻一二号に発表された「最後の格闘」は井口長二、山内秋生、鹿島鳴秋、清水かつらの合作冒険小説「闇の光」の一部である。

[3] 大正一五年四月に新報社から発刊された『少女文芸』の執筆陣には、室生犀星や小川未明、久米正雄なども名を連ねていた。この『少女文芸』の第一年六号（大正一五年九月）からは「この号から先輩鹿島鳴秋氏の後を受けて、私が本誌の編集を、しばらくあづかることになりました。皆さまのご後援をおねがひいたします」とあるように、山手（井口長二）が編集を担当していた。

[4] この後記には題名がないので、この年譜では無題とした。

[5] 「お千加茶屋」は、現在では「お千代茶屋」と改題されている。

[6] 「小父さん志士」の初出はこれまで不明であったが、立教大学大学院日本文学専攻博士前期課程二年の中辻智子氏の指摘によって判明した。記して謝意に代えさせていただく。

[7] 「少年の虹」はその初出媒体が『朝日新聞ジュニア版』であることからも、子供向けに書かれた時代小説である。内容は、賢一・又太郎・弥太・三太という十代の少年たちがまぼろし組なる強盗を追い詰め、最後は遠山奉行が捕縛するというもので、まさに山手版「少年探偵団」と言える内容である。文芸評論家の石井冨士弥は『山手樹一郎長編時代小説全集』別巻一に併収されている「竜虎少年隊」に関して、「幕末の大江戸の怪盗団を夜警する山手版〝少年探偵団〟」と述べている。少年たちが怪盗ふくろ組から江戸の町を守るという内容から確かにそう言えるかもしれない。しかし「少年の虹」は、遠山奉行が乱歩の少年探偵団ものにおける明智小五郎の役割を果たしており、そういった点でも「少年の虹」こそが山手版少年探偵団と言える著作なのである。ここから山手樹一郎、江戸川乱歩が共に豊島区在住で、「豊島文人会」に所属していたことによる交流がうかがえる。詳しくは拙稿「『貼雑年譜』に見る江戸川乱歩と山手樹一郎の交流」（『大衆文化』第一一号、平成二六年九月、立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター）をご覧頂きたい。

ちなみに「少年の虹」の詳細な初出年月は筆者の調査によって判明したものである。

[8] 「夕立の女」はＮＨＫに以来された書いた山手にとって初のラジオドラマの台本である。既存の年譜でもその著作の存在は明らかであったが、初出紙誌は今回の調査で初めて明らかになった。同じページに掲載されている高島秀「企画・演出メモ」には、「ＮＨＫの放送時刻改定とともに、第一放送の所謂金ドラとして馴染まれて来た放送劇が、文字通りゴールデン・アワ

ーに組み込まれたということです。（略）今までの放送劇作家陣を更に拡げ、所謂小説家からも広く台本を提供しようという企画が生れ、今回山手樹一郎氏にもお願いすることになったのです。先生が放送劇は初めてだからと仰言るのを無理にというより聊か強引に書いて頂いたのがこの『夕立の女』で、原稿を頂く時、放送劇の細かい約束というか、書き方が解らないからこう書いたが、後は演出者に任すというお話だったのです。原稿を示しながらのお話だと、実に細かい点まで後注意があり、効果音に対する配慮は履物の音に至るまで及んでいました」というように、当時の経緯も窺える。

[9] この後記には題名がないので、この年譜では無題とした。

[10] 「鮒釣り」は現在のところ、山手樹一郎最後の著作であると判明した。この随筆は親交のあった『大衆文芸』の土師清二追悼号に寄せたもので、山手自身逝去するまで一年をきっていることから、他の作家に比べ、かなり短い文章になっている。

【紙誌出版社一覧】

『少女号』（小学新報社）／『小学画報』（新報社）／『タカラノクニ』（小学新報社）／『少女文芸』（新報社）／『婦人画報』（東京社）／『仮面』（八千代書院）／『大陸』（大陸新報社）／『探偵よみもの』（国際文化社）／『夕刊タイムズ』（夕刊タイムズ社）／『読売新聞』（読売新聞社）／『北国新聞』（北国新聞社）／『相撲』（日本大相撲協会）／『丸』（連合プレス社）／『歴史読本』（人物往来社）／『小説ファン』（銀座文庫）／『あまカラ』（甘辛社）／『大衆小説』（双葉社）『大衆小説』（双夢社）／『放送文化』（日本放送出版協会）／『婦人生活』（婦人生活社）／『月刊いけぶくろ』（池袋社）／『青春タイムス』（弘和書房）／『新演芸』（光友社）／『戦線文庫』（興亜日本社）／『新満州』（満州移住協会）／『肥料』（肥料協会）／『芸能文化』（芸能文化協会）／『海の村』（全国漁業組合連合会）／『週刊読売』（読売新聞社）／『天狗』（岩谷書店）／『平凡』（平凡出版株式会社）／『別冊　宝石』（宝石社）／『文藝春秋』（文藝春秋社）／『都道府県展望』（全国知事会）／『産業新潮』（産業新潮社）／『労働安全衛生広報』（労働基準調査会）／『新青年』（博友社）／『冒険少年』（日本正学館）／『大衆文芸』（新小説社）／『大衆文芸』（新鷹会）／『少女の友』（実業之日本社）／『主婦の友』（主婦の友社）／『婦女界』（婦女界出版社）／『家の光』（家の光協会）／『こども家の光』（家の光協会）／『文芸朝日』（朝日新聞社）／『講談と実話』（講談と実話社）／『週刊新潮』（新潮社）／『読切雑誌』（教材社）／『週刊サンケイ』（サンケイ新聞出版局）／『映画と演芸』（朝日新聞社）／『小説春秋』（桃園書房）／『小説と講談』（双立社）／『富士』（世界社）／『読切倶楽部』（三世社）／『潮』（潮出出版）／『小説倶楽部』（桃園書房）／『実話講談の泉』（世界社）／『朝日新聞ジュニア版』（朝日学生新聞社）／『小説街読物別冊』（高島屋出版部）

（かげやま・りょう　本学博士課程後期課程在学生）